

黄雀行動——六四・天安門活動家を救出した香港への海上密輸・密航路

中村達雄

はじめに

黄雀行動(イエローバード・オペレーション、英名は Operation Yellow Bird、あるいは Operation Siskin)とは司徒華(1931-2011、立法局議員、教師、社会運動家)が主席をつとめた香港市民支援愛国民主運動聯合会(支聯会)^{❖1}が香港の密輸・密航組織に依頼し、中国大陸～香港間の陸海密貿易・密航ルート(主に海路)を通じ、六四・天安門事件に関わって当局から指名手配された学運リーダー、民主運動人士、学者、作家ら(以下、本論では「天安門活動家」と略称する)を救出した一連の行動のことを指す。黄雀行動が大規模に展開されたのは1989年6月下旬から同年末まで(確定した呼称がないので、本稿では「第一次黄雀行動」とよぶことにする)とされるが、それ以降も香港の主権が中華人民共和国に返還される直前の1997年6月まで(同上「第二次黄雀行動」)断続的に実施された。また、台湾を経由して天安門活動家の第三国への亡命を支援した「黄鳥計画」もある。1989年末までの黄雀行動で救出された天安門活動家の人数は133人、1997年6月までの期間で数えると少なくとも300～400人が中国の公安、国家安全部の追跡を振り切って香港に逃れ、後に第三国へ亡命していった^{❖2}。本論は、1989年6月から同年末までのもっとも活発に展開された黄雀行動を中心に行論する。本論の構成は、まず第1章で六四・天安門事件に到るまでの1980年代における中国の政治状況を敷衍し、第2章では六四・天安門事件前後に中国共産党がこの民主化運動にいかなる対応をしたのかをたどり、そして第3章で黄雀行動がどのような救出作戦であったのかを具体的に検証する。本論は、黄雀行動の実態を明らかにすることを目的としている。六四・天安門事件には幾多の先行研究^{❖3}があるのでここで詳細に立ち入ることはせず、本稿を展開する上で必要な事象だけを簡潔に扱う。

1、六四・天安門事件に到るまで

筆者^{❖4}の実感として、1980年代は中華人民共和国の現代史のなかで文化大革命をはじめとする過酷な政治的独裁から民主への転換の可能性を孕んだ稀にみる良好な時代だった。いわゆる「四つの基本原則」(社会主義の道、人民民主独裁、共産党の指導、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の堅持)で縛られた社会で「精神汚染」や西側からの「和平演変」の「危険性」が党によって叫ばれたにも関わらず、社会が概ね安寧に推移したからだ。それは改革開放政策による市場経済の始動で民生の向上と民心の安定が寄与し、中国社会が政治的、文化的な活気を取りもどしたことによる。たとえば民国時代から演劇界で活躍し、しかし文革で迫害され、投獄経験を持つ趙丹(1915-1980)が末期の膀胱癌に侵された身体最後の力を振りしぼり、政治・社会の民主化を訴えることができたのも八〇年代の劈

❖1…香港市民支援愛国民主運動聯合会(支聯会、Civil Human Rights Front)は、1989年5月21日、北京の天安門で政治の民主化を求めて集結した学生らを支援する「中国学生運動的グローバル大遊行」が挙行された際に香港で発足した。

❖2…江沢「黄雀行動背後 港人救命救命内情」『禁书网』2013年4月1日付け。https://www.bannedbook.org/b5/resources/file/2033#google_vignette。台湾経由の「黄鳥計画」でも約400人が第三国に亡命を果たしたという証言がある。「港英高層力勸黄雀核心 別走近海辺」『蘋果日報』2009年5月22日付け。

❖3…たとえば、張良編、アンドリュー・J・ネイサン/ペリー・リンク監修、山田耕介/高岡正展訳『天安門文書』(文藝春秋、二〇〇一年)、石井知章・及川淳子編『六四と一九八九——習近平帝国とどう向き合うのか』などがある。

❖4…筆者は1978年9月～1982年7月、北京に在住した。1990年1月から1995年3月まで香港に駐在し、黄雀行動で救出された活動家らとの交流があった。

❖5…アンドリュー・J・ネイサン「習近平と天安門の教訓」石井知章・及川淳子編『六四と一九八九——習近平帝国とどう向き合うのか』（白水社、2019年）33頁。

❖6…張博樹「三十年後に見る天安門事件」石井知章・及川淳子編『六四と一九八九——習近平帝国とどう向き合うのか』（白水社、2019年）100頁。

頭であった。あの時代、ゆるやかな経済の自由化にともない、中国社会はおだやかに民主の機運を胚胎していった。その芽を一気に摘み取ってしまったのが、六四・天安門事件だった。この事件は、当局が民主化を求める学生らに容赦のない銃口を開き、戦車で弾圧した現代史のおぞましい記憶である。筆者はこの事件で1970年代に学んだ北京語言学院における幾人かの学友、たとえば事件後にフランスへ亡命し、台湾海峡から大陸中国に向けて「民主の電波」を送出することを計画した放送船「民主女神号」の活動に秘書長として参画した許天芳らの無念を目にすることになる。ソ連・東欧の激変に中共党=国家の崩壊の可能性を恐怖した鄧小平は、天安門に座り込んで絶食抗議までした学生や民主活動家の行動を「反革命暴乱」と決めつけ、軍隊を動員して過酷に弾圧した。

1-1、胡耀邦治世の自由化

胡耀邦(1915年11月20日-1989年4月15日)は三中全会(中国共産党第十一期三中全会、1978年12月18日-22日開催)で提議・決定された経済の対外開放政策(後の改革開放政策)が緒についた1982年6月に中国共産党中央委員会総書記に就任し、1987年1月の政治局拡大会議で解任された。記者、作家、学者、企業経営者から一般大衆に至るまでイデオロギー面で西側諸国の影響を受けやすい国内環境が生まれ、その流れを押しとどめることができなかった^{❖5}、という保守派の主張が解任の理由である。1980年代の中国には政治・経済・社会の「自由化」と「反自由化」の闘争がせめぎ合い^{❖6}、水面下で絶えず争っていた。保守派が「反自由化」の拠り所としたのが上述した「四つの基本原則」で、「精神汚染」や西側からの「和平演変」に対する恐怖が党によって声高に叫ばれ、社会に緊張をもたらしている。改革派と目された胡耀邦は、この「反自由化」の巻き返しに抗しきれずに解任され、1989年4月15日、心筋梗塞で不帰の人となった。

胡耀邦の後を継いだのは趙紫陽(1919年10月17日-2005年1月17日)で、1987年1月に中共中央総書記に就任する。胡とおなじ改革派とみなされた趙を最高指導者に押し上げたのは鄧小平であり、そこには鄧みずから牽引する経済の改革開放政策にブレーキをかけたくなかった、という思惑があったことはまちがいない。

1-2、趙紫陽の失脚

中国社会が1980年代にゆっくり胚胎した「自由化」の機運は、「四つの基本原則」で中共の独裁統治を盤石にしようともくろむ「反自由化」とのせめぎ合いに晒される。天安門広場で発生した胡耀邦の追悼行動は政治・社会の民主化を求める学生運動に発展し、



それが六四・天安門事件に繋がってゆく。学生運動の激化を憂慮した中共は4月25日夜、李鵬國務院総理の提案で中共中央宣伝部副部長の曾建徽が起草した「必須旗幟鮮明地反対動乱」(旗幟を鮮明にして動乱に反対しなければならない)と題する文章をまずテレビ・ラジオのニュースで放送し、翌26日には『人民日報』に社説として掲載した。これによって、学生運動が「動乱」として決めつけられ、社説の撤回を求める学生の運動は激化して天安

門広場は緊張し、状況は膠着状態を深めてゆく。この間、趙紫陽は北朝鮮訪問(4月末～5月初)で北京を離れ、深刻化する学生運動に対応できていない。帰国後の5月4日、アジア開発銀行理事会総会で演説し、学生の理にかなった要求は法律にもとづいて満たすべき、などと述べた。また、16日には訪中したソ連のゴルバチョフ大統領との会談において、中国共産党で決定権を有しているのは鄧小平であり、重要問題は鄧の舵取りが必要などと述べ、鄧小平に局面悪化の責任を負わせたと解釈され、鄧小平や保守派との関係が決定的に悪化した。この間、趙紫陽、李鵬ともに広場を占拠した学生と対話している^{❖7}が局面は打開されず、市民の街頭デモが120万人に達し、民主運動で沸騰した天安門広場には1万人以上の学生が徹夜で集結した。こうした情勢のなかで趙紫陽は責任をとって辞表を認めざるを得ない状況に追い込まれた。同月18日には8人の長老、4人の政治局常務委員会委員、3人の中央軍事委員会委員^{❖8}が合議し、北京に戒厳令を敷くことが決められた。事件が鎮圧されたあとの6月23日～24日の二日間にわたって開催された第13期中全会で、趙紫陽は動乱を支持し、党を分裂させ、「四つの基本原則」を逸脱し、ブルジョア自由化に寛大だったと断罪され、党のすべての職務から解任された。

2. 中共内部の事後対応

六四・天安門事件の前後、中共とくに最高指導者として君臨した鄧小平がなにを考えていたのかについては、『鄧小平文選』第三卷(人民出版社、1993年)にある①「結束過去、開闢未来」(「過去を終わらせ、未来を切り開く」。これは訪中したゴルバチョフ大統領との会見で語った談話の一部、1989年5月16日)、②「組成一個実行改革の有望的領導集体」(「改革を実行する有力な指導グループの確立」。これは党中央首脳的李先念、陳雲に語った談話、1989年5月31日)、③「在接見首都戒嚴部隊軍以上幹部時的講話」(「首都戒嚴部隊幹部と謁見した際の講話」。これは六四・天安門事件を鎮圧した戒嚴部隊幹部を謁見した際に発表した講話、1989年6月9日)、そして④「第三代領導集体的当務之急」(「第三代指導グループが当面急ぐべき任務」。これは党中央幹部との会見で語った談話、1989年6月16日)などをたどってゆけば知ることができよう^{❖9}。

まず、①の鄧小平とゴルバチョフ大統領との会見で、鄧は「過去三十年間、中国に対する外国からの威嚇がどこからもたらされているのか」と切り出し、国内的には「改革開放政策と四つの基本原則の堅持を決定した」と語り、対外的には欧米が仕掛けている「和平演変」について言及している。これは暗に天安門広場における学生を主体とする腐敗反対、民主化要求運動の背景に欧米が関与していると批判したものだ。②の党中央首脳的李先念、陳雲との会見で行った談話で、鄧は「資本主義的な自由化に反対し、四つの基本原則を堅持することは動かしがたいことである。わたしたちは四つの堅持をおろそかにしてよいのか。人民民主独裁、マルクス主義、社会主義、共産党の指導を堅持するのか否か、これがもっとも大事な問題である」と強調している。③の首都戒嚴部隊幹部と謁見した際の講話では、「『人民日報』4月26日付け社説(「=」旗幟を鮮明にして動乱に反対しなければならぬ)は天安門の問題を動乱とした。反対勢力はこの「動乱」という二文字を修正するよう求めてきたが、その後、事態が反革命暴乱に発展したことが証明しているように、社説が「動乱」と判断したのは正しかった」、「わたしたちの軍隊は永遠に党の指導下にある軍隊であり、永遠に国家、社会主義、人民の利益を守る軍隊であ

❖7…趙紫陽、李鵬、喬石、胡啓立、芮杏、羅幹らは5月18日午前5時に北京市内の共和医院、同仁医院にハンストで倒れた学生を見舞い、学生の愛国心と自己犠牲の精神に言及して、民主と法制、腐敗反対、改革推進を求める熱意はきわめて貴重だなどと述べ、学生を鼓舞した。李鵬はさらに李鉄映、閻明復、陳希同らと同日午前11時に人民大会堂で王丹、ウアルカイシ、王超華ら学生リーダーと会見し、この会見の目的は天安門広場のハンストを終わらせる方法の模索に限られると述べ、学生らの諸要求を拒否した。前掲、張良編、アンドリュー・J・ネイサン/バリー・リンク監修、山田耕介/高岡正展訳『天安門文書』213～217頁。
❖8…8人の長老とはそれぞれ鄧小平、陳雲、李先念、彭真、鄧穎超、楊尚昆、薄一波、王震で、4人の政治局常務委員会委員は李鵬、喬石、胡啓立、姚依林のことである。3人の中央軍事委員会委員とは洪学智、劉華清、秦基偉のことを指している。前掲、張良編、アンドリュー・J・ネイサン/バリー・リンク監修、山田耕介/高岡正展訳『天安門文書』217頁。
❖9…『鄧小平文選』(人民出版社、1993年)第三卷、291～314頁。

る」と徹頭徹尾、天安門における軍隊の行動が正しかったことを強調している。④の党中央幹部との会見で発表した談話では、「西側の帝国主義諸国は社会主義諸国に社会主義の道を放棄させ、最終的に国際独占資本と資本主義の支配に組み込もうとしている。わたしたちは旗幟を鮮明にして、この逆流に抗してゆかなければならない」と述べ、「四つの基本原則を堅持することではいかなる譲歩もすべきではない」と強調している。これら四つの談話の内容を注意深く検証してゆくと、①、②、④はいずれも欧米各国が仕掛けてきていると鄧小平が考える「和平演変」に対する警戒と「四つの基本原則」の堅持を語り、これを実行するために天安門で実施した市民に対する軍事的な弾圧行為は正しかった③、としている。

その『鄧小平文選』の注釈に、六四・天安門事件に対する党中央(=鄧小平)の評価が乗っているので、ちょっと長いが以下に引用してみよう。

1989年4月15日に胡耀邦が逝去し、国民はそれぞれの形で胡に対する哀悼の気持ちを示した。哀悼行動のなかで、^{よこしま}邪な考えを抱く少数の者が根拠のない噂を流し、人心をまどわせ、大字報やビラなどを使って党と国家の領導を侮辱・攻撃し、共産党の指導と社会主義制度に反対するよう煽った。4月26日、『人民日報』は「旗幟を鮮明にして動乱に反対しなければならない」(必須旗幟鮮明地反対動乱)と題する社説を掲載した。当時、中共中央総書記の任にあった趙紫陽は動乱を容認し、支持する態度をとってその激化を助長する。5月13日以来、北京の非合法学生組織「高自聯¹⁰」は一部の絶食抗議者を扇動し、天安門広場を長期にわたって占拠した。こうした状況のなかで、国務院は社会の安定と秩序の回復を図ることを目的に5月20日より北京の一部地区で戒厳令を敷く決定を下す。これに対して、動乱の組織者、画策者は政府と戒厳部隊の抑制的な態度を利用し、引き続き天安門広場の占拠をつづけ、各種の非合法活動を組織し、動乱を最終的に反革命暴乱に発展させた。6月4日、党と政府は人民に依拠して果敢な措置をとり、反革命暴乱を平定した(筆者訳)¹¹。

これが『鄧小平文選』が刊行された1993年10月時点における中共党=国家の六四・天安門事件に対する公式見解である。

六四・天安門事件後の6月19日～21日の三日間、中国共産党政治局拡大会議が開催された。この会議の目的は、六四・天安門事件で軍隊を使い、市民を弾圧した中共の行動をいかに正当化するか、というところに主眼が置かれた。長老を中心に徐向前(人民解放軍元帥)、彭真(全国人大常務委主席)、王晨(国家副主席)、李瑞環(政治局員)、宋任窮(中央顧問委員会副主任)、李先念(前国家主席)、万里(全国人大委員長)、聶榮臻(退役元帥)、薄一波(前政治局員)らが相次いで最高責任者の鄧小平の考え方を支持して学生らの行動や趙紫陽を断罪し、天安門広場における軍事行動を正当化する発言を行った¹²。発言者全員が天安門の悲劇の原因は、趙紫陽の任務遂行が至らなかったという認識で一致した。この拡大会議の場で趙紫陽のすべての職務剥奪が決まり、続く23日～24日に開催された第13期四中全会で李鵬が「反党反社会主義動乱において趙紫陽同志が犯した誤りに関する報告」を行ない¹³、趙紫陽の解任が正式に決定された。これら二つの会議が開催される前の6月13日、北京市公安局は天安門活動家を全国一斉指名手配した。

❖10…北京市高校学生自治連合会。中国で「高校」は「高等院校」、すなわち大学を意味する。

❖11…前掲、『鄧小平文選』第三巻、410～411頁注釈109参照。

❖12…前掲、アンドリュー・J・ネイサン「習近平と天安門の教訓」、29～45頁。

❖13…前掲、張良編、アンドリュー・J・ネイサン/ペリー・リンク監修、山田耕介/高岡正展訳『天安門文書』、431～434頁。

3、 黄雀行動の展開

軍隊によって天安門活動家が鎮圧されたあとの6月13日、北京市公安局から「北京市公安局逮捕「高自聯」在逃分子通緝令」(北京市公安局、「高自聯」逃亡分子指名手配令)が発出されると、香港の司徒華、岑建勳^{❖14}らは支聯会を通じて指名手配された天安門活動家に対する救出活動に乗り出し、岑は映画俳優の鄧光栄(アラン・タン、広東省順徳出身)^{❖15}が紹介した高世昌を通じてその具体的な活動を中国大陸から香港への海上密輸・密航ルートを生耳する陳達鈺(六哥、1944-)に依頼した。陳達鈺は支聯会副主席の岑建勳、鄧光栄、そして高世昌らと集議し、救出にかかわる費用、指名手配者に関するデータ^{❖16}を支聯会が提供することで合意した。陳達鈺はこの救出活動を引き受けた理由について、「天安門で学生らが軍隊から発砲された事実を到底受け入れることができなかった」と述懐している^{❖17}。

陳達鈺(六哥)の「六哥」は、陳家の六番目の息子という意味だろう。中国共産党が中華ソヴェト臨時中央政府を置いた江西省に生まれ、9歳のとき、首に赤いネッカチーフを巻いた少年先鋒隊員として党に忠誠を誓う少年に成長した。1970年代に香港へ密航し、黄大仙の天台小学校で珠算、地理などを教え、鐘士元(香港の政治家、資本家)や查済民(香港の富豪)らが経営する工場で労働に従事した。1980年代に独立して洋酒販売、麻雀館などを経営し、そのころ洋酒の輸入をきっかけに密輸業者との関係を築く。雑誌『前哨』の筆頭株主をつとめた人物としても知られる。六四・天安門事件では、「個人渺小、歴史偉大、生命有限、真理永恒」(個人は小さく、歴史は偉大、生命は有限、真理は永遠)の信念を抱いて救出活動に邁進した^{❖18}。

陳達鈺はみずからの六四・天安門事件観について、「六四事件は中共を救った。なぜなら、中共は「六四事件」を経験することで、いかにして革命党から執政党になるかを学んだからだ。その後、「三つの代表」政策で先進的な生産力、先進的な文化の方向性、広範な人民の根本的な利益を代表するという考え方が生まれ^{❖19}、そして胡錦濤の「科学的な発展観」が導き出された。このように、中共は段階的に進んできた。六四事件には破壊の一面と歴史を回転させた発展の一面があり、国家にとっては進歩だったと思う。これは六四事件のなかで、唯一の慰めである。これから時代が進むにつれ、六四事件に対する中共の見方も変わって来るだろう。(天安門活動家たちの)名誉は回復されないかもしれないし、回復されるかもしれないという見方も排除できない^{❖20}と語っている。これは愛国的な中国人の感情に通底する考え方である。陳達鈺が天安門活動家の救出活動に手を貸したのはその愛国的な中国人としての感情から出たものにちがいない。ここから、陳達鈺の抱くイデオロギーが決して極端な反中共でも、反中国でもないことが見てとれよう。

この救出作戦は最初から「黄雀行動」と命名されていたわけではなかった。当初は関係者のあいだで「秘密通道」(秘密ルート)という符牒で呼ばれていた。救出活動が一段落したあとの1991年6月、支聯会幹部の岑建勳が英国放送協会(BBC)の取材を受けた際、「螻蛄捕蝉、黄雀在後」(螻蛄は蝉を窺い、黄雀は後ろにあり=螻蛄が蝉を狙っているそのすぐ後ろで、黄雀がいまにも螻蛄に跳びかかろうとしている)という中国の故事に思い至り、一連の救出行動を「黄雀行動」として紹介している^{❖21}。ここで岑建勳は、螻蛄を中国共産党傘下の公安・国家安全部当局、人民解放軍、蝉は六四・天安門事件で指名手配された学運リーダー、民

❖14…建勳(John Shum、1952年5月21日-)は中国広東省に生まれた。香港の著名な社会活動家、ジャーナリスト、映画監督など複数の顔を持つ。香港市民支援愛国民主運動聯合会の結成に参画し、副主席を務めた。

❖15…香港の芸能界は六四・天安門事件に際し、「民主歌声献中華」などの大規模な歌声集会を開催し、その収益で民主派学生らの運動を支援し、救出活動に資金援助した。

❖16…支聯会は当初、人権団体アムネスティ・インターナショナルが保有する中国の被抑圧者およそ800名のリストを参考にした。そのなかでは労働運動のリーダー韓東方、知的エリートの包尊信らがよく知られる。黄雀行動が開始されたあとでは、まず第一に全国に指名手配された天安門活動家21人のリストが用意され、そのなかには王丹、エルケシュ・デレット(ウルケシ=ウアルカイシ)、柴令らが含まれた。第二のリストは23名の民主派知識分子リストで、方励之、万潤南らが含まれる。第三のリストは、六四・天安門事件後に出入国が制限された異見人士49名のリストだった。

❖17…『ボイス・オブ・アメリカ』(VOA) 2016年5月1日インタビュー「專訪六四黄雀行動指揮“六哥”」。
<https://www.youtube.com/watch?v=9A3Raro7p6E&t=325s>。

❖18…同前、江沢「黄雀行動背後港人會命救命内情」。

❖19…江沢民総書記が2000年2月、広東省を視察した際に発表したスローガン。

❖20…前掲、『ボイス・オブ・アメリカ』(VOA)「專訪六四黄雀行動指揮“六哥”」。

❖21…前掲、江沢。

❖22…香港メディア『香港01』2017年6月3日付、張秀賢「拒絶遺忘 承先啓後」。

<https://www.hk01.com/%E9%A6%99%E6%B8%AF%E5%9C%B0%94983/%E5%85%AD%E5%9B%9B28%E6%8B%92%E7%B5%95%E9%81%BA%E5%BF%98%E6%89%BF%E5%85%88%E5%95%9F%E5%BE%8C%E5%BC%B5%E7%A7%80%E8%B3%A2%E9%A6%99%E6%B8%AF01%E5%8D%9A%E8%A9%95>

❖23…『蘋果日報』2009年5月22日付け「民運人士刺光猪驗證 港英高層力勸黃雀核心:別走近海辺」。

運人士、活動家らを指し、黄雀にみずからの支聯会、およびそれに協力した密輸・密航組織を仮託したのだろう。

一方、支聯会主席の司徒華が亡くなった直後の2011年1月、陳達鉅は『亜洲週刊』の取材を受け、「黄雀行動」という名前は司徒華が命名したもので、過去20年間、世間に流布した「蠙螂捕蟬、黄雀在後」の故事から引いたわけではないと証言している。司徒華もその回想録『大江東去』（牛津、2011年）で、「黄雀行動」という名称は「蠙螂捕蟬、黄雀在後」から引いたものではなく、後漢末期から三国時代にかけて活躍した詩人曹植（192-232）の「野田黄雀行」にみえる「捕獲された黄雀が小童に助けられる故事」から着想を得たと書いている。多分に中国当局を刺激しないよう周到に考えぬかれた説明のように聞こえる。岑建勳説と陳達鉅・司徒華説のいずれが正しいのか公開されている史料が不足しているので判断に迷うが、あるいは司徒華が名付けた「黄雀行動」という名称を、岑建勳が英国放送協会の取材を受けた際、「蠙螂捕蟬、黄雀在後」に引きつけて紹介したとも考えられる。司徒華は生前、黄雀行動は政治的にきわめて敏感な部分を含み、関与した人物の詳細など明らかにできない部分が多い、と証言している。後述するように、指名手配された天安門活動家を救出するためのオペレーションには非法の密輸・密航組織をはじめ、香港政庁、香港駐在の各国領事館、香港と中国の政府諸機関官員、人民解放軍兵士によるきわめて政治的に敏感で、なかば超法規的な支援や、香港市民150万人が天安門活動家に声援を送った街頭活動、香港芸能界が救出資金集めに開催した「民主歌声献中華」（民主の歌声で中華に貢献しよう）などの歌声集会、政治家、社会運動家など多方面の水面下による援助があり、活動の詳細を公表することが叶わず、その状況は現在も変わっていない。「黄雀行動」という名称の由来に諸説があるのも、また、政治的に敏感な要素が影響していると考えられよう。

3-1 黄雀行動の方法

黄雀行動は1989年6月下旬、すなわち北京市公安局が6月13日に「逃亡分子指名手配令」を出してしばらくしたあとに開始された。救出活動のほとんどは、密輸・密航ルートが確立していた海路を使って実施されている。香港メディア『香港01』によれば、救出ルートは主に広東省広州市、汕頭市、汕尾市、珠海市、そして福建省廈門市、海南省などの香港に近接しているか、あるいは比較的近距离にある中国大陸の港湾が利用された（図版）^{❖22}。さらに『蘋果日報』によると、広東省蛇口～香港屯門へのルート（快速艇で30分）、深圳沙頭角～香港上水（深圳河を挟んで深圳市に隣接、快速艇で30分）、深圳市南澳鎮～香港西貢（陸路と快速艇で1時間）、広東省惠州市惠東県港口鎮～香港柴灣・筲箕湾（快速艇で5時間）、広東省汕尾市～香港黄竹坑（快速艇で7～8時間）も救出ルートとして利用されている^{❖23}。



多くの天安門活動家は指名手配されると北京から地方に逃れ、そこに潜伏した。支聯会がその名簿と潜伏先を入手し、それを受け取った陳達鉅は実弟の陳達鉅（七哥）や配下の者を中国国内の潜伏先に向かわせ、潜伏者

を沿海部の港湾で待つ密輸・密航船まで誘導した。その際、潜伏者が救出対象者であることを確認するために割符が使われた。割符の多くは写真や紙幣を二枚にちぎったもので、潜伏者側が半分を、潜伏者を密航船まで誘導する救出側がもう半分を所持し、それが一枚の写真、あるいは紙幣として符合すれば、それを本人確認の証とした^{❖24}。

天安門活動家が北京から地方へ脱出する際には、黄雀行動側が準備した偽造身分証や偽造旅券が使われている。北京から地方、あるいは迎えの船が待つ港湾までの国内移動には変装や化粧で年齢や風貌を詐称し、公安や国家安全部の追跡を振り切った。身分証の検査が厳しい空港や航空機の利用は控え、列車や長距離バスなど比較的警戒が緩い交通機関を利用した^{❖25}。

こうした国内の隠密移動方法は現在もほぼおなじで、1970年代に筆者が北京で在籍していた大学の同級生(現在、枢要な国家機関幹部)によれば、地下鉄駅や路上における臨検が日常的な現在、「敏感」な物品を所持して移動する者は市内でも入構検査の厳しい地下鉄は使わず、乗車に際して検査のいらないタクシーや路線バスを利用するという。また、饗応が厳しい罪に問われる昨今、地方出張で現地の幹部から酒食の席に誘われても断り、どうしても断りきれない場合にはすべての費用を自分で持つことにしていると証言する。その場合、支払いがカード決済にせず、現金で支払う。現金払いなら、カードのように記録が残らないからである。

香港から近距離にある中国の港湾から、あるいは沖に停泊する大型貨物船から香港まで天安門活動家を運ぶのは高馬力の船外機を3～4基装備した高速艇「大飛」で、中国の水上艇の航行速度ではまったく追いつくことが出来ず、香港の水上艇も「大飛」のスピードには敵わなかった、と陳達鉦は証言する^{❖26}。

救出活動の具体的な事例に関し、陳達鉦は『ボイス・オブ・アメリカ』のインタビューで趙紫陽の子息趙二軍、その妻と娘、および趙紫陽のブレンだった陳一諮らの救出作戦についても証言している。それによれば、趙二軍は北京から海南島に逃れ、そこから陳学陽名義の偽名旅券を使って出国を試みた。出国審査で偽名パスポートは疑われ、審査官は上司に報告する。最終的に海南省の梁湘省長の判断を仰ぎ、梁省長はいかなるパスポートで出国しようとしているのかを問い、それが中華人民共和国旅券で法的に有効であるという報告を受けると、陳学陽(=趙二軍)の出国を許可した。梁湘の子息は陳達鉦と良好な関係にあり、そのことが趙二軍救出作戦を成功に導いた、と陳は述懐する。梁湘省長は、天安門の民主運動と趙紫陽を支持していた。梁はほどなく北京に召喚されて二カ月間に渡る軟禁・査問を受け、当時、進行中だった海南省洋浦港開発プロジェクトが売国的で国益を損なっているという口実も加えられ、その責任もとらされて省長職を追われ、1998年12月、不遇のうちに没している^{❖27}。筆者は当時香港に在住し、香港メディアが伝える洋浦港開発プロジェクトの「スキャンダル」を毎日のように目にしていたが、その背景に黄雀行動と趙紫陽を支持した梁湘省長の政治的な問題が絡んでいたことは想像すらできなかった。

次に、趙二軍の妻および娘の救出作戦を見てみよう。陳達鉦によれば、趙二軍が出国したあと妻娘はしばしば当局から監視、尾行されるようになり、公安の目に隠れて北京を離れ、広東省に潜伏した。そこへ陳達鉦の実弟の陳達鉞が迎えにゆき、高速艇で珠江を下って香港・屯門の龍虎灘に上陸する。香港で妻娘を引き受けた陳達鉦が車で市街地へ移動する途中、警察の定期検問に遭った。陳達鉦の車には護身用のピスト

❖24… 同前『ボイス・オブ・アメリカ』「專訪六四黃雀行動指揮「六哥」」。

❖25… 同上。

❖26… 同上。

❖27… 同上、および同前江訊「黄雀行動背後港人舍命救命内情」。

- ❖28…同上。
- ❖29…陳一諮『陳一諮回憶錄』(香港・新世紀出版社、2013年)
- ❖30…前掲、陳達鉦『ボイス・オブ・アメリカ』(VOA)「專訪六四黃雀行動指揮“六哥”」。
- ❖31…実務は、政治顧問のステイーヴン・ブラッドリーが担当した。前掲江訊「黃雀行動背後港人舍命救命内情」。
- ❖32…前掲、陳達鉦『ボイス・オブ・アメリカ』(VOA)「專訪六四黃雀行動指揮“六哥”」。
- ❖33…前掲、江訊「黃雀行動背後港人舍命救命内情」。

ルが積んであったので、検問に危険を感じた陳達鉦は香港総督府(第27代 デイビッド・クライブ・ウィルソン総督)へのホットラインで電話をかけ、総督府側は検問所の所在地を尋ねてきた。検問の係官はほどなく上司からの指示で、妻娘一行が乗る車両を通過させた。陳達鉦はまず一行をみずからのオフィスに連れてゆき、そのあとでフランス領事館に送り届けた^{❖28}。このことから、当時、香港のフランス領事館をはじめ、いくつかの国の領事組織が黄雀行動に協力し、天安門活動家の亡命活動に協力していたことがわかる。

趙紫陽のブレン、陳一諮(1940-2014)も海南島に潜伏していた。支聯会から情報を渡された陳達鉦は陳達鉦、そしてみずからを支聯会に紹介した高世昌を現地に送って陳一諮と合流させた。陳は二人の手配で海南島の港湾から7千トン級の貨物船に乗せられ、珠江口まで来たところで陳達鉦が手配した快速艇(船外機4基を装備し、中国、香港の水上警察艇は追いつくことができなかった)に乗り換え、香港に入港する。陳達鉦は陳一諮を迎えるとそのまま支聯会に引き渡し、陳一諮はほどなくフランス経由で米国に亡命を果たした^{❖29}。

陳達鉦はみずからが中心になって関わった第一次黄雀行動で救出した天安門活動家のなかに、趙紫陽のブレンだった陳一諮、趙紫陽の子息趙二軍、およびその妻娘、廠家其、蘇曉康、王潤生、遠志明、祖慰、徐剛、王超華ら著名人が含まれていたことを明らかにしている^{❖30}。

3-2 黄雀行動の支援者・組織、受入施設、救出経費

黄雀行動を支援・協力した組織、個人は香港、中国の両方に複数存在した。まず、英国は救出作戦に関わる事項を最高機密の「A級保密」事項に指定し、英国の植民地香港の統治を担っていた香港政庁は、その首長である香港総督が水面下で協力^{❖31}した。具体的には、救出対象者が香港に入港する際、あるいは入港後の検問で便宜を計ったことである。黄雀行動の中核を担った陳達鉦は総督府との間にホットラインを有し、救出対象者が入国管理、もしくは香港域内で検問に抵触した場合すぐに電話で連絡し、関連部署の上部から現場に指示が出され、救出対象者の安全な入港が実現した。それは前節で検討した趙二軍の妻および娘の救出作戦にみた通りである^{❖32}。

香港の民間ではすでに上述したように、香港市民150万人が街頭に出て天安門活動家に声援を送り、香港芸能界は「民主歌声獻中華」(民主の歌声で中華に貢献しよう)などの大規模な歌声集会を開催して支援・救出資金を集めた。また、政治家、社会運動家、密輸・密航組織、そしてそれらを社会の裏側で束ねる香港黒社会など多方面の支援や協力が

あった。香港に駐在する『新華社』の官員、中国系新聞の『文匯報』や『大公報』の社員、あるいは中国の香港出先機関の官員などのなかにも多数の支援者や協力者がいた^{❖33}。

中国国内では、前節で取り上げた趙紫陽の子息趙二軍の救出作戦のときのように、黄雀行動と趙紫陽を支持した海南省長の例などがある。また、国境の水際で警備任務につい



ていた人民解放軍の軍人や武装警察などの協力も見逃せない。陳達鉗が中国国内で救出者を港湾まで誘導する途中、路上で軍隊の車両検問にあった。車内には眼鏡をかけて変装した複数の天安門活動家がいたので、陳達鉗はもうこれまでと観念しかけたとき、担当の軍人が黙認し、検問を通してくれた。こうした現場の軍人や武装警察が救出作戦に協力した背景には二つの要素が考えられる。第一は軍人、武装警察の内部に人道的な立場から天安門活動家に対する大量弾圧、大量逮捕を望まなかった者が存在したことだ^{❖34}。第二の要因は、香港の救出組織側から中国官員、軍人、武装警察への賄賂による目こぼしがあったことも否めない。しかし、このことについてはすでに司徒華が証言したように、黄雀行動は政治的にきわめて敏感な内容を含んでいることから、詳細を明らかにできないという事情がある。中国大陸に支援者、協力者が多くみられるのは、中国の現代史のなかでみればわずかに10年間という短期間にせよ、社会が民主的な雰囲気を胎した1980年代という時代の賜物であった、とも言えよう。

無事に香港へ入境を果たした天安門活動家は、政治的にきわめて「敏感」で可能な限り早期に第三国へ亡命する必要がある者を除き、まず、上水(深圳に隣接)の水上市警察総区から人民入境事務処へ送られ、その後、同地域内にある新屋嶺勾留センターで脱衣状態による個別審査を受けた。人民入境事務処の勾留期限は1週間以内で、その間に政治難民であるか否かが判断された。たとえば広東省で学生運動を組織して追われた陳破空のように審査で政治難民と認められなかった者は香港から台湾などに送られ、そこから第三国へ亡命していった。

政治難民と認定された天安門活動家が一時的に收容された受け入れ施設は香港域内に10カ所ほどあった。馬料水(九龍半島新界九肚山麓)の赤泥坪村、西貢(九龍半島新界西貢海沿岸)泥涌の匡湖居、上水の金錢村、元朗の錦田、屯門の藍地、そして銅鑼灣などに準備された收容施設である。沙田の富豪花園は天安門活動家の逃亡を手助けして香港に逃れた中国公安人員らを専門に收容した。

一時的に香港の受け入れ施設に收容された天安門活動家には、民間から生活に必要な物品や健康面での支援も多くあった。具体的には、香港明愛(カトリック系の貧困救済・支援組織)から衣類が提供され、医師の林巨成、蔡元雲らは医療を提供した。香港電訊(HKT=ホンコン・テレコム)は、天安門活動家が中国大陸や海外と連絡するための長距離通話用に携帯電話6台を準備した^{❖35}。

3-3 黄雀行動が孕んだ問題

黄雀行動はその支援・協力面では、多くの香港市民、芸能界、政治家、企業家、社会活動家、そして中国側の軍人、武装警察、省市の高官など広範な人々を巻き込んで実施された。実際の救出現場では密貿易・密航など非合法組織の元締めだった陳達鉗やその兄弟、仲間が陣頭指揮に立ち、彼らが保有する、あるいは影響下にあった密輸・密航船を使い、天安門活動家を中国大陸から香港まで秘密裏に救出する活動が進んだ。1989年末、陳達鉗が部下の逮捕・拘束を契機として救出作戦から手を引いたあとは、密航部分を香港の三合会^{❖36}、あるいは中国語で「黒社会^{❖37}」と呼称される裏組織の高速船団が中心になって担っている。新義安、聯合榮、聯榮堂、十四K、義堂、東聯社などの非合法組織である。非合法で、法的に敏感な組織であったために、黄雀行動へ

❖34…同上。

❖35…前掲、『蘋果日報』2009年5月22日付け「民運人士剥光豬驗證 港英高層力勸黃雀核心:別走近海辺」。

❖36…香港を拠点にして活動する複数の犯罪組織の総称。

❖37…中国語圏でギャング、マフィアなどの犯罪組織を総称する言葉。

❖38…天安門活動家を中国北方から香港まで移送する費用は1人およそ30万香港ドルだった。広州から香港までの費用は1人約15万香港ドルを要した。1回で20人を移送したときの救出費用は約100万香港ドルで、これは第1次黄雀行動において1回の救出活動に支払われた最高額である。前掲、江沢「黄雀行動背後港人舎命救命内情」。

❖39…前掲、江沢「黄雀行動背後港人舎命救命内情」。

❖40…注7参照。

❖41…香港の左派家庭に生まれ、父親は共産党員で『新晩報』の編集長だった。16歳で広州の高級中学(日本の高校に相当)に進学して文化大革命を経験した。国家機密漏洩罪に問われて投獄され、出所後の1989年には香港貿易発展局北京代表の職を辞して自由アジア電台(TV)に転職し、六四・天安門事件に遭遇して、黄雀行動にかかわるようになった。

❖42…前掲、陳達鉦『ボイス・オブ・アメリカ』(VOA)。

の関わりは記録として公表されていない。これはオペレーションの詳細を後世に伝える上で、大きな障害となっている。

天安門活動家を中国大陸から救出する費用も、大きな負担になった。密航業者に支払う報酬、香港経由で第三国に亡命するまでの生活費、出国費用、支聯会が毎月各被救出者に支給する費用の3千香港ドルなどを合算すると、1人当たり平均60万香港ドル(約7万6千米ドル)を要した。第一次黄雀行動では133人の天安門活動家が救出されて第三国への亡命を果たしたので、単純に計算しても7千980万香港ドル(約1千万米ドル)かかったことになる^{❖38}。1996年6月までの第二次黄雀行動も含めると総計約400人が救出されているので、費用総額は2億4千万香港ドル(3千40万米ドル)となり、表には出てこない水際で天安門活動家の中国脱出を助けた中国各組織高官や国家安全部、人民解放軍兵士らへの賄賂を含めると、費用はさらに積み上がってゆく。この巨額にのぼる費用を支聯会が単独で手当てできるはずもなく、いったいどこから援助を受けたのかは、黄雀行動が政治的にきわめて敏感な内容を含んでいたためにほとんど明らかにされていない。

筆者が1990年代初頭に香港で在籍した企業では、第三国への亡命を待つ天安門活動家をデリバリー・ボーイ(書類などの配達員)として雇い、毎月、3千香港ドル前後を報酬として支払い、生活面の援助をしていた。この企業のスタッフに支聯会と関わりのある者が在籍しており、その関係で支聯会から臨時的な雇用を依頼されたものと思われる。

天安門活動家は、香港の各地に点在した収容施設内で亡命の時期を待った。馬料水や西貢の受け入れ施設では、収容者の数が50人を超えた時期もある。第三国への出国を待つ者のなかには設備が良好ではない住環境や先行き不安からくる情緒不安定で諍いも頻発し、また、若者のあいだでは収容者間、あるいは香港人との恋愛感情が芽生えることもあり、それへの対処は収容施設の管理者や現場の担当者を悩ませる問題でもあった^{❖39}。

3.4 黄雀行動の終息

第一次黄雀行動は1989年の年末に終わった。中国大陸から救出された最後の1人は天安門広場の学生リーダーの1人で、5月18日に人民大会堂で王丹、ウアルカインらと李鵬に会った王超華^{❖40}だった。王は北京と天津の中間地点にあった凱悅酒店(ハイアット・リージェンシー)に潜伏していた。陳達鉦の弟、陳達鉗が救出に向かい、航空機で広州へ移動しようとしたが、王は当局に発見されるのを恐れて搭乗を拒否した。このため、王に化粧を施して変装し、列車で移動している。広州に到着後、高速艇に乗り換え、無事に香港へ入境を果たした。これが、陳達鉦が関わった最後の黄雀行動である。

その後、羅海星が^{❖41}中国当局から陳子明が湛江(広東省最南、対岸は海南島)に潜伏しているという偽情報を掴まされ、陳達鉦の部下、李龍慶と黎沛成の二人が救出に向かい、そこで拘束された。陳達鉦は急遽北京で公安部一局の譚松裘局長と交渉し、「既往不咎、来去自由」(過去のことは咎めず、従来通り香港と中国大陸間の往来は自由にする)を求めた。譚局長は、「行動が愛国でありさえすれば、そこには共通の言葉がある」という考え方を示し、陳達鉦が求めた「既往不咎、来去自由」は認められ、李龍慶と黎沛成の2人は半年ほどで釈放された。陳達鉦はこれを契機に公安部と対峙するような行動は控え、救出行動もやめた、と述懐^{❖42}している。陳達鉦は2人の部下を助けるために譚松裘公安部一局長

とのあいだで妥協を成立させ、黄雀行動から手を引いたものと思われるが、その間の詳細については現在も明らかにしていない。

この一事をきっかけにして、陳達鈺と司徒華支聯会主席との関係に亀裂が走り、支聯会はその後の1996年6月（香港の主権が中国に返還される前夜）まで続く第二次黄雀行動で天安門活動家を中国大陸から香港まで移送する密航プロセスを香港の「三合会」、あるいは「黒社会」と呼ばれる裏組織の高速船団に委ねることになる。

おわりに

本稿は香港市民支援愛国民主運動聯合会（支聯会）が1989年6月下旬から1996年6月まで実施した黄雀行動の前半部分（第1次黄雀行動）を検討したものである。行論を通じて、以下の諸点を明らかにすることができた。

- 1、第1次黄雀行動は支聯会が中国大陸との海上密輸・密航組織の元締めだった陳達鈺に依頼し、六四・天安門事件直後の1989年6月下旬から同年12月末までの6カ月間に実施された。この間、133人の天安門活動家が救出された。
- 2、救出活動の大部分が海上密輸・密航ルートを通じて実施され、中国大陸の沿岸部から香港まで天安門活動家を秘密裏に移動させた。
- 3、黄雀行動の展開にともない、香港市民150万人が街頭に出て天安門活動家に声援を送り、香港芸能界は「民主歌声献中華」（民主の歌声で中華に貢献しよう）などの大規模な歌声集会を開催して支援・救出資金を集めた。また、政治家、社会運動家、果ては中国国内の省政府や国家安全部、公安局、人民解放軍などに属する人たちによる暗黙の支援や協力があつた。
- 4、中国大陸から救出されて香港入境を果たした天安門活動家で政治的にきわめて敏感な者は香港政庁やフランス領事館の判断で、即時に英国やフランス、米国に移動・亡命した。それ以外の者は香港各地に設置された収容施設で第三国への亡命手続きが整うまでの時間を過ごした。香港で政治難民に認定されなかった救出者は台湾などに送られ、そこから第三国へ出国・亡命した。
- 5、救出作戦の中核を香港の非合法組織が担ったために黄雀行動自体がきわめて政治的に「敏感」な色彩を帯び、そのためにオペレーションの多くの部分が闇につつまれ、詳細な記録や関連資料も公開されていない。また、黄雀行動に使われた膨大な資金の出所も、その大半が明らかになっていない。

第一次黄雀行動に続いて1996年6月末（香港の主権返還前夜）までの間に第二次黄雀行動が実施されて200人以上の天安門活動家が中国大陸から救出されたことが明らかになっている。救出プロセスを香港の「三合会」、あるいは「黒社会」などの裏組織に委ねたため、第二次黄雀行動もその詳細は公表されていない。香港とは別に、台湾でも天安門活動家を救出するための「黄鳥計画」が実施され、多くの活動家が福建省の沿岸などから漁船で台湾海峡を渡った。これら第二次黄雀行動と台湾「黄鳥計画」は引き続き資料の渉猟につとめ、将来の研究課題としたい。